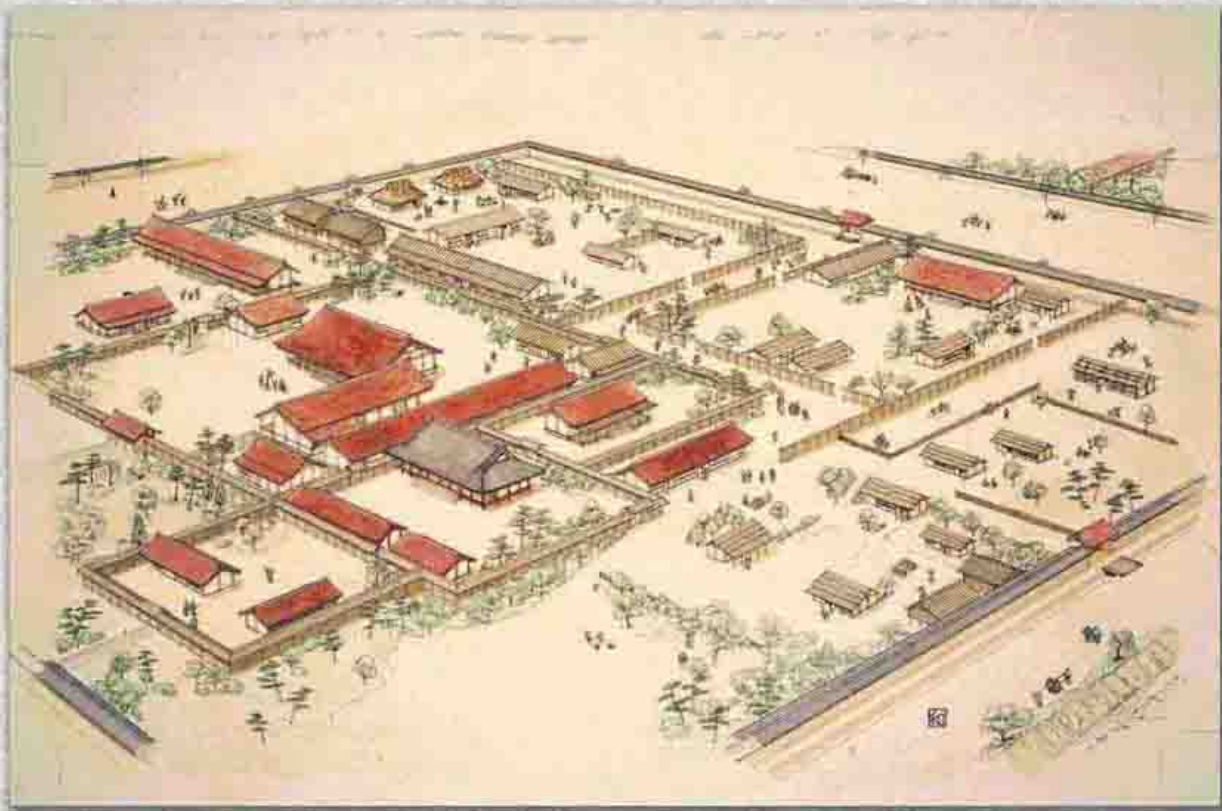


山口県史だより

第24号／平成19年10月

特集 長屋王と周防大島



長屋王邸復元図 イラストレーション：早川和子氏、奈良文化財研究所提供

特集 長屋王と周防大島

天武天皇の孫である長屋王の邸宅跡から、古代史研究の貴重な史料である木簡が大量に出土しました。木簡の記載内容から、長屋王家の日常生活が鮮やかに浮かび上がってきましたが、その中に長屋王家と周防国が塩で結ばれていたことを示す木簡がありました。

今回は、本年度刊行予定の、『山口県史』で初めての通史である『通史編 原始・古代』の刊行に先立ち、館野和己専門委員の執筆部分からその一部を紹介いたします。
なお、「」内は『通史編 原始・古代』（以下『通史編』と略記）からの引用です。

■長屋王家木簡とは

「平城宮のすぐ東南にあたる平城京左京三条二坊一・二・七・八坪では、奈良時代初頭にその四つの坪を占める大規模な邸宅遺跡が見つかった。そして八坪の東南隅に掘られた、長さ二七・三メートル、幅三メートル、深さ一メートルほどの溝状の土坑から、三万五〇〇〇点余という大量の木簡が出土した。それらに書かれた内容から、そこが長屋王邸であったことが判明したため、木簡群を長屋王家木簡と呼んでいる」。

■長屋王とは

「長屋王は天武天皇の孫で、父は高市皇子。宮内卿・式部卿・大納言などを歴任し、養老四年（七二〇）に死去した右大臣藤原不比等の跡を継ぎ、養老五年に右大臣になり、さらに神亀元年（七二四）聖武天皇即位とともに左大臣に昇った。ところが天平元年（七二九）二月、謀反の疑いをかけられ妻子とともに自殺に追い込

まれた人物である」。

没年は「懐風藻」によれば五四歳で、「尊卑分脈」によれば四六歳となります。

謀反の疑いを受けた理由は、左道を学んで国家を傾けようとしたというものでした（『統日本紀』）（以下『統紀』と略記）天平元年二月条）。しかし、後年になって、長屋王の変は「誣告」（『統紀』天平十年七月条）、つまり冤罪であったと記録されています。

■長屋王と周防との結びつき

「長屋王邸からは周防の塩の荷札が大量に出土した」。

「荷札は各地から都城に貢進される調や庸などの税物に結びつけられた送り状であり、どこかの国郡里（郷）の誰が、いかなる税目によって何をどれだけ、そしていつ貢進したかという内容を記したものである」。

「長屋王家では塩が産地によって、周防塩や



平城京の構造と邸宅所在地（渡辺晃宏『日本の歴史第04巻 平城京と木簡の世紀』講談社 2001年より転載）

角鹿塩などと呼ばれていたようである。一種のブランドといえよう。そして産地が分かるのは、塩には荷札が付けられたまま保管されていたからであろう。また塩は籠に入れられていたことが分かる。（中略）籠に「三斗入」と注記されているから、正丁一人分の調塩が一つの籠に入れて貢進されたのである」。

左頁の木簡は大嶋郡屋代里から長屋王家に塩三斗がもたらされたことを示しています。

また、館野委員は、長屋王邸跡から出土した大嶋郡の調塩木簡について、次のような特徴を

記述されています。

「長屋王家木簡には、大嶋郡の三里（郷）のうち、屋代里と務理里の調塩木簡はあるが、美敢里のものはない。こうした明確な特徴は、屋代・務理の二里が長屋王の領有する封戸であったことを意味するのではなからうか。調塩が長屋王邸にもたらされたルートとしては、いったん宮内省大膳職に保管された後に来るといふルートと、封戸から直接納入されるルートの二つの可能性がある。しかし、これだけ同じ里からの木簡が多いことは、前者ではなかなか想定しにくい。それに長屋王邸出土の木簡には年紀が記されたものがない。平城宮跡出土の美敢郷の木簡には、それがあつたことを考えると、王家の木簡の特殊性がより鮮明になる」。

封戸とは上級貴族に国から与えられていた給与のことです。

■長屋王の怨霊

「長屋王が謀反の罪によって自殺に追い込まれた天平元年（七二九）二月から一年半後の翌年九月に、安芸・周防国の人々が妄りに禍福を説き、多くの人衆を集めて死魂を妖祠したため、政府がそれを禁じたのである（『統紀』同月庚辰

〔二十九日〕条、古九〇）。両国の人々が祭った

「死魂」とは、長屋王の可能性があるのでなからうか。天平九年には都で天然痘が大流行し、武智麻呂・房前・宇合・麻呂の藤原四兄弟が四月から八月にかけて相次いで死去し、その政權はあつけなく倒壊した。それからまもない十月二十日に、聖武天皇は長屋王の子女である安宿王・黄文王・円方女王・紀女王・忍海部女王に、まとめて叙位を行っている（『統紀』）。それは長屋王の怨霊が天然痘を引き起こしたと考え、それを鎮めるためであつたとみられるのではないか（寺崎保広「『若翁』木簡小考」『奈良古代史論集二』真陽社、平成三年）。もしそうであるなら、安芸・周防国の人たちが祭った「死魂」も、長屋王のそれである可能性が浮かんでくる（直木孝次郎「長屋王の怨霊と木簡」『本郷』二六、平成十二年）。もしこの推測に誤りなければ、両国と長屋王との関係は、周防国大嶋郡に王の封戸があつたことに由来するのではなからうか。大嶋郡は周防の東端であり、安芸に近いという位置的關係もそれに符合するところである」。



「周防国大嶋郡屋代里弓刊部山村御調塩三斗」と書かれた長屋王家木簡 奈良文化財研究所提供



周防大島 北西方向より撮影

以上、「通史編」の一端をご紹介いたしました。「通史編」には、そのほかにも興味深い話がたくさん載っています。どうぞ、ご期待ください。

収集資料の保全に向けて

平成四年度以降、資料編等の編さんのため、多くの考古遺物について写真撮影や実測図の作成を進めてきました。現在、蓄積した個々の資料について、名称・出土遺跡・収蔵機関・時期等の基本情報を盛り込んだ資料詳細目録を作成しています。並行して、山口県に係わりのある考古学的な出来事を年表形式で取りまとめられています。

(担当 河村・徳本美)



収集資料の一部

古代部会

樫野荘

山口市小郡上中郷にある熊野神社をご存じですか。この神社は樫野荘二四村の総鎮守とされています。

樫野荘は八世紀中ごろ周防国吉敷郡設定の東大寺領荘園で、中世末期まで存続していました。領域は山口市小郡・嘉川地区であったと考えられます。

樫野荘の設定理由としては東大寺建立に力を尽くした聖武天皇・光明皇后との関係も可能性の一つに考えられています。

(担当 石風呂・山本)



熊野神社

中世部会

板に描かれた頂相

下の写真は、下関市長府の日頼寺所蔵の頂相です。頂相とは、禪宗の僧侶の肖像画のことです。また、これには肖像の描かれた人物に係わる賛と呼ばれる文章が記されています。

頂相は、普通、紙や絹布に描かれ掛け軸にされますが、この頂相は板に描かれ、上部に、つり下げられるように金具が付けられています。このような頂相は、県内でも大変珍しいものです。

(担当 今地・高橋・倉恒)



恵海和尚頂相

無溪和尚頂相

近世部会

決意表明!

校正中の「史料編 近世4」（経済2）を今年度中に刊行すると、一年おきに残りの三巻を刊行するという過密スケジュールが待っています。二年後に刊行する「史料編 近世5」（文化）は、今年度中に原稿を完成させる予定で鋭意作業を進めています。

複数の本を並行して編集するのは、なかなか大変ですが、刊行計画にそって史料編を着実に刊行していきます。

(担当 河本・松島・宮崎)



編集作業の様子

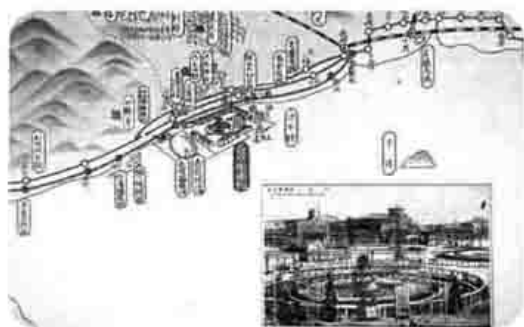
近代部会

鉄道会社の集客戦略

鉄道網の広がりにあわせて、鉄道会社は集客戦略の一環で、沿線の温泉地や海水浴場などの観光地整備をすすめていきました。

山陽電気軌道による長府楽園地の開園もそのひとつでした。大滑り台・演芸館・浴場・食堂などが整備され、都市近郊のレジャーランドとして活況を呈していました。やがて、軍靴の響きが高まる中、神戸製鋼所長府工場へと姿を変えることになりました。

(担当 浅川・徳本敦・伊藤)



「山陽電軌沿線案内」(山口県文書館蔵)

明治維新部会

「幕末維新4」刊行に向けて

今回の調査では、幕長戦争で長州藩を勝利に導いたミニエール銃を実際に手にすることができました。初めて触れた銃は、ずしりと重く、これで野山を駆けて射撃をすることは相当な訓練と体力が必要だと感じました。

幕長戦争を扱う「史料編 幕末維新4」では、ミニエール銃で感じた重みのように、史実を肌で実感してもらえらるような史料を収録します。

(担当 磯部・宮本・村里)



「ミニエール銃」(岩国市本郷歴史民俗資料館蔵)

民俗部会

暮らしの変化

民俗部会では、「民俗編」の刊行に向け編集作業を進めています。この巻では、風習、人間関係、道具などの身近な暮らしの変化をテーマとしています。

今と昔を比べてみると、便利な生活の中で新しく生まれたものがある一方、消えていったものもあります。

井戸端会議があったころの暮らしと何が違うのか、考えてみるのも良いかもしれません。

(担当 石水・小本)



井戸端の風景(柳井市商家博物館むろやの園)

現代部会

新聞の見出し入力

現代部会では以前から、編さんに係わる基礎資料作成のため、全国紙(山口版)から記事の見出しを入力する作業を行っています。

特定の事項を指定して見出しのデータを検索すると、その事項に係わる見出しの一覧が作成でき、いつ、どのような出来事が起こったか、その推移はどうか等、事項に係わる出来事の概要を把握する手がかりとなります。

(担当 関谷・古屋・上杉)



作業風景写真

地球温暖化を見つめて四〇年

元防衛大学校教授 原田 朗



梅の頃、阪神方面からイカナゴのくぎ煮と手紙が届いた。解禁日を待って獲った新子は「赤ちゃんイカナゴが中学生くらいになっていた」とあった。一寸釘大に育つと大女子（おおなこ）と言うそうだ。瀬戸の海は早くから暖かかったらしい。東京では、ちらつく雪のもとで桜が咲き、歌舞伎舞台さながらだった。地球温暖化も、これならまだ我慢もできる。それにしても真鍋博士が、化石燃料の大量消費が招く百年後の気温予測を米国の雑誌に発表したのは一九六八年だった。当時の世間は、ただ聞き流すのみだった。

その後研究は進み、国連の専門機関は「気候変動に関する政府間パネル」を設けた。そこでは研究の進展につれ、科学的「評価報告書」を公表してきた。九三年前後、私はこのパネルで日本代表を務めてきた。もう一人の代表は通産省の川口順子女史だった。通常ジュネーブで開催されたが、アフリカで旱魃が起れば、ジンバブエに集まるほどに、パネルは活発であった。

私はその後、相模湾と江ノ島の児玉神社を眺める今の住居に転居したのだが、近所に地球環境戦略研究機構（IGES）という施設ができた。開所式の来賓は川口女史だった。これは日本出資の国際機関で、そこにジンバブエの気象局からも研究者が派遣されて来たのには驚いた。この紳士は気候変動の影響調査の仕事で一年ほど滞在し、拙宅に寄るなどしていた。そして今年にはパネルが第四次評価報告書を公表し、世に事の重大さを訴え続けている。

昨年は、山陽小野田の海に大魚ナルトビエイが押しかけ、アサリを食い荒らしたという。エイは南国ハワイでは観光資源だが、瀬戸内に現れるとこのようなことになる。IGESの丘から眺める相模の海にも、時に熱帯魚が姿を見せるといふ。かくも地球環境に変化が起り、気候誌に新たな話題を添えている。測定器のない時代の気候は、樹木の年輪を調べるか、丹念に文書記録に当たるほかはない。古文書解読の副産物に期待したい。

（徳山出身）

新南陽郷土史会



一 経緯と趣旨

この会は、平成十六年一月に会員約五〇名にて発足してより、現在三年を経過、四年目に入ろうとしている。

この会の設立の趣旨は、平成十五年に平成の大合併により県下に先駆けて周南市が誕生し、新しい時代へと第一歩を踏み出したところであるが、そこで忘れてはならないことは、この地域に先人の遺した歴史や文化をここで改めて顕彰し、着実に次の世代に引き継いでゆくことが大切との思いからであった。

二 活動の内容

現在までの活動の内容は、先ず郷土の歴史を学び、かつ知る、ことが必要であることから、年五、六回の専門講師を招いての講座（古代、中世、近世）や、古文書講座、春秋の文化財ウォーク探訪などである。探訪は歩いて歴史を感じることが出来るから健康にもよいし、人気がある。

三 今後の課題

今後は、グループによる地域内の調査、個別テーマの研究発表や、古老を招いての対談、さらに会報を発行して情報交換の場を設ける等、少しずつ活動の幅を拡げてゆく方針である。

また、学術上からも注目されている竹島古墳についても、行政の取り組みを側面からバックアップしてゆきたい。

（会長 徳王丸康夫）

事務局 周南市長田町三五一一 会長宅



富田地区の探訪会 四熊家前

石炭鉱業の名残

戦後、石炭鉱業は、占領期には傾斜生産方式の下で経済の復興を支え、また一九五〇年代半ば～六〇年代を中心とするエネルギー革命により閉山を余儀なくされるまで、地域における産業の柱となっていました。

左上の写真は、山陽小野田市の海岸近くの住宅地に残る本山炭鉱の坑口跡です。宇部・小野田地域では、戦前から海底での有煙炭採掘を特徴としてきましたが、当炭鉱もその一つです。炭鉱は一九六三（昭和三十八）年に閉山しましたが、坑道は沖合約三キロメートル、海面下約二〇〇メートル、総延長約一九キロメートルにわたり延びていました。

左下の写真は、この坑口跡近くの石炭を積み出した棧橋跡付近の海岸です。打ち寄せられた砂地に、砕けた石炭や「ボタ（硬）」が多く含まれています。

無煙炭を産出した内陸部の美祿地域では、品位の低いボタは「ボタ山（硬山）」に捨てられましたが、当地域の炭鉱では、海面の埋立に多く利用されました。かつては、海岸に散乱するボタが選別して拾い集められ、家庭用の燃料とされることもありました。

（関谷）



本山炭鉱坑口跡



棧橋跡付近の海岸

『史料編 中世4』の刊行準備すすむ

現在までに三巻の『史料編』を刊行してきた中世部会では、『史料編』としては最後となる『史料編 中世4』の刊行準備をすすめているところです。

『史料編 中世4』では、豊浦地区所在の文書をはじめ、現在は県外に所在するが、中世は周防・長門に所在した家の文書を収録する予定です。また、県内所在の画幅の賛のほか、文学史料（五山文学・和歌・連歌）も精選して収録する予定です。

響灘から関門海峡を通り瀬戸内海へと、三方を海に開かれた豊浦地区。そのような地理的特徴を持つ豊浦地区は、長門の国府や守護所が置かれ、長門国分寺・住吉神社・忌宮神社・赤間神宮などの古い歴史をもつ寺社が多く、要港の赤間関を擁し、多彩な歴史的歩みを留めています。

豊浦地区には、日本史の大きな流れの中で、この地区がいかに歴史に関わってきたかが窺える史料が多く残っています。

また、画幅の賛や文学史料からも、山口県の歴史の一面を垣間見ることができま

す。このような史料を収録する『中世4』にどうぞご期待ください。（今地）



足利直義が南北朝の動乱期に住吉神社に天下静謐の祈禱を命じた文書（住吉神社蔵）



幾多の歴史を見つめてきた関門海峡（写真、下関市提供）

山口県史の構成・刊行計画 (全42巻)

【通史編】 6巻

原始・古代
中世
近世
幕末
近世
現代

【民俗編】 1巻

【史料・資料編】 33巻

- 既刊 考古1 (原始)
既刊 考古2 (古代以降)
既刊 古代 (古代史料)
既刊 中世1 (記録)
既刊 中世2 (県内文書1)
既刊 中世3 (県内文書2)
中世4 (県内文書3・県外文書・
文学資料)
既刊 近世1 (政治1)
既刊 近世2 (政治2)
既刊 近世3 (経済1)
近世4 (経済2)
近世5 (文化)
近世6 (諸家文書1)
近世7 (諸家文書2)
既刊 幕末維新1 (政治・経済1)
既刊 幕末維新2 (政治・経済2)
既刊 幕末維新3 (政治・社会3)
幕末維新4 (政治・社会4)
幕末維新5 (経済)
既刊 幕末維新6 (軍事)
幕末維新7 (文化)
既刊 近代1 (政治・社会・文化1)
近代2 (政治・社会・文化2)
近代3 (政治・社会・文化3)
既刊 近代4 (産業・経済1)
近代5 (産業・経済2)
既刊 現代1 (県民の証言 体験手記編)
既刊 現代2 (県民の証言 聞き取り編)
既刊 現代3 (言論・文化・フランク文庫)
現代4 (産業・経済)
現代5 (政治・社会)
既刊 民俗1 (民俗誌再考)
既刊 民俗2 (暮らしと環境)
【別編】 2巻
統計
年表・索引

山口県史だより 第24号

平成19年10月31日発行

編集・発行/山口県史編さん室

〒753-8501 山口市滝町1番1号

TEL 083-933-4810

FAX 083-928-2705

県史刊行の

お知らせ

▼今後の配本予定巻についてお知らせいたします。

「通史編 原始・古代」は、冒頭に、本県の個人的な地理的環境や県土の生い立ちを叙述する「人と環境」編を設け、院政開始(一〇八六年)までの山口県の歴史的な歩みや特性等を叙述します。

「史料編 中世4」は長門部(山口県西部)の豊浦地区に現存する史料を中心として収録します。

「史料編 近世4」は社会的分業にスポットをあて、防長地域における商品生産や流通の諸局面を活写する具体的かつ特徴的な史料を収録します。

「史料編 近代5」は、大正期から昭和戦前期を対象として、山口県の経済概況を把握し、産業経済の特徴を示す史料を収録します。どうぞご期待ください。

こちら
県史編さん室

▼去る九月十五日、山口市の「山口県教育会館」を会場に第一

六回山口県史講演会を開催しました。講師は、山口県史編さん委員・考古部会長の金関

恕先生(大阪府立弥生文化博

物館長)で、「弥生人の日々―祭りと

信仰―」と題して講演されました。この

講演の概要は、来年三月発行の「山口県

史研究」第一六号に掲載する予定です。

▼「山口県史」および「山口県史研究」のお申し込みは、左記あてにお願いいたします。

〒七五三-八五〇-一 山口市滝町一番一号 山口県刊行物センター内
山口県刊行物普及協会 電話(〇八三) 九三三-二五八三

FAX(〇八三) 九三三-九一三九



講演中の金関先生